平田塾と地方国学の展開
――武蔵国の神職を中心に――

中川　和明

はじめに

平田国学は近世後期・幕末維新期に全国的に拡大し、社会変革を深層から支える運動として機能していた。しかし、門人数には地域的な偏差がみられる。武蔵国の門人は江戸の平田塾に地理的に近い位置に居住していたのであり、他の地域とは大きく条件を異にしていたのである。武蔵国での平田派の増加は何をもたらしたのであろうか。従来の研究では、武蔵国の平田派の神職について、個別的・部分的な言及がなされることはあったが、全体的な動向を把握するといったことはなされていない。本稿では、武蔵国の平田門人の神職層の入門や活動などを見ていくことで、平田国学の地方的な展開を明らかにしたいと思う。武蔵国の幕末維新を見直す一助とするものである。なお、本稿では『国立歴史民俗博物館研究報告』を「報告」と略記している。『門人姓名録』とその№は『新修平田篤胤全集』別巻に依拠している。

一　平田国学と江戸・東京の神職の入門

（一）篤胤生前の門人江川大和

文化（一八〇四）年、篤胤は江戸に講莚を開き門人をとるようになる。【表1】は、平田塾に入門した江戸・東京の神職である。篤胤生前では、文化・文政年間に入門者が多いことに気がつくであろう。江戸の神職で篤胤生前

【表１】江戸・東京の神職の平田門人

№.	姓名	入門年月日	紹介者	諱など	住所	年齢	現在地（推定）
5	若林和泉	文化2年		妙義両神職	駒込妙義坂		東京都豊島区駒込3-16-16 妙義神社
14	江川大和	文化5年		初小四郎、神職卜成、安豊	南鍋町一町目内田屋		不詳
63	松永伊勢	文化11年		亦平松氏	新肴場〔新場〕道切町、稲荷祠神主		不詳
134	森左近	文化13年	富直利〔上総介〕	初名梅松丸、藤原義春	本所表町朝日神明神主		東京都墨田区東駒形1-18-10　船江神社
154	白石織江	文化13年	村山直方〔帯刀〕	藤原義映	駒込追分金毘羅祠持		東京都文京区本郷1-5-11 金刀比羅神社
617	木村庸之助	嘉永1年3月4日		木村隼人男、信嗣	神田明神社家	15歳	東京都千代田区外神田2-16-2　神田神社
2621	伊吹左京	明治1年10月21日	小泉	菅原昌寿	東京、根津神社神主		東京都文京区根津1-28-9 根津神社
2692	三宅民部	明治1年11月1日	岡部愛信	藤原良秀	東京芝口三丁目、日比谷稲荷神主	23歳	東京都港区東新橋2丁目1-1　日比谷神社
2720	永羽右衛門	明治1年11月		次美	東京、竹長稲荷神主		東京都港区麻布10番１丁目4-6　十番稲荷神社
2723	村上帯刀	明治1年11月		源貞誠	東京白魚屋敷、豊蔵稲荷神主	25歳	不詳
2858	富田〔岡〕栄	明治1年12月14日	小泉	周徹	東京富岡、八幡宮神主		東京都江東区富岡1-20-3 富岡八幡宮
2864	西東修理	明治1年12月	田中定秋	藤原勝幸	東京柴、神明宮神主	24歳	東京都港区芝大門1-12-7 芝大神明宮
2865	河野主馬	明治1年12月	田中定秋	越智通寿	東京柴、神明宮神主	39歳	東京都港区芝大門1-12-7 芝大神明宮
2946	大岡兵庫	明治2年1月9日		源清利	王子神社神主	34歳	東京都北区王子本町1-1-12　王子神社
2947	斎藤織部	明治2年1月9日		藤原実穎	東京赤坂氷川、〔氷川祠掌〕		東京都港区赤坂6-10-12 赤坂氷川神社
2950	井上帯刀	明治2年1月14日	大貫貞寛	藤原貞兼	東京、根津神社神主	42歳	東京都文京区根津1-28-9 根津神社
3077	中村大内蔵	明治2年2月15日	野田俊昌	正敬	東京小日向、氷川神社神主	17歳	東京都文京区小日向2-16-6 小日向神社
3165	甫喜山民部	明治2年4月22日	和田重雄	源光夫	東京八丁堀、稲荷橋神社神主	20歳	東京都中央区湊一丁目6-7 鐵砲洲稲荷神社
3408	津久戸数馬	明治2年9月16日	井上鉄直〔改頼国〕	実秋〔後実融〕	東京、築〔筑〕土社神主		東京都新宿区筑土八幡町２－１　筑土八幡神社
3410	筑土宮内	明治2年9月16日	白幡義篤	邦順	東京牛込、築〔筑〕土八幡宮神主		東京都新宿区筑土八幡町２－１　筑土八幡神社
3411	加治伊織	明治2年9月16日	白幡義篤	徳順	東京牛込、赤城社神主		東京都新宿区赤城元町１－10　赤城神社
3416	亀岡道住	明治2年9月27日	白幡義篤		東京市ヶ谷、八幡宮神主	31歳	東京都新宿区市谷八幡町15 市谷亀岡八幡宮
3782	和田重雄	明治3年5月4日	田中定秋		東京八町堀稲荷神主甫喜山光夫厄介		東京都中央区湊一丁目6-7 鐵砲洲稲荷神社
2851	矢掛弓雄	明治1年12月	田中定秋	吉備正麿	武蔵国葛飾郡隅田村、水神神社神主	37歳	東京都墨田区堤通2-17-1 隅田川神社
766	小泉帯刀	安政2年2月25日		勝善	武州荏原郡品川、品川大明神々主	20歳	東京都品川区北品川2-30-28　荏原神社（品川貴船社）※明治8年品川貴船社から「荏原神社」に改称
2626	鈴木左大夫	明治1年10月	小泉	正方	武蔵国荏原郡品川駅、貴布祢神社神主	21歳	東京都品川区北品川2-30-28　荏原神社（品川貴船）
2777	柴崎隼人	明治1年12月	岩井宅道	藤原宣弘	武蔵国荏原郡麻布、氷川神社神主	35歳	東京都港区元麻布1-4-23 麻布氷川神社
2867	椎名上総	明治1年12月		平光胤	武蔵国荏原郡渋谷豊沢村、〔青山熊野社司〕	28歳	東京都渋谷区神宮前2-2-22 熊野神社（青山熊野神社）

〔注１〕№.は、『門人姓名録』（『新修平田篤胤全集』別巻）の番号。

〔注２〕赤坂日枝神社の平田門人は【表２】を参照。多摩郡の門人などは、【表８】を参照。

に入門した人物はかなり限られていたことがわかる。明治以降の入門者について、この表ではかつての御府内に相当する地域の神社を載せた。現在の多摩地方などの神職については、本稿の第三章で触れることにする。

さて、主な人物に絞って少し説明を加えておきたい。例えば、篤胤生前の門人江川大和というのは、初期平田塾の世話役を務めていた人物である（文化一二年一一月一五日付菅能屋聴講礼金取極覚、平田篤胤関係資料一-一五）。江川については、『玉襷』に

文化の末・文政の始め頃に、専（モハラ）と講釈の前座を勤めたるは、江戸人北村久備、江戸安豊らなりき（版本『玉襷』巻一〇）

とある。つまり、文化末から文政年間の初めに、篤胤の講釈の前座を務めていたことがわかる。目立たない人物であるが、初期平田塾を支えた存在であったといえよう。【表1】のように篤胤生前、その他にも江戸の神職が数人入門しているが、何れも無名の存在である。こうした無名の神職とともに、初期平田塾は成長していったのである。

（二）日枝神社と篤胤没後の門人

①宮西中務と皇朝医学

日枝神社は文明年間、太田道灌によって江戸の産土神として江戸城内に勧請された。天正一八年、徳川家康が産土神社として城内紅葉山に移した。さらに、半蔵門外の元山王（現国立劇場付近）に移されたのである。江戸庶民の崇敬をあつめ、同時に徳川幕府から手厚く保護されていたのである。明治元年より社号は「日枝神社」となった。

さて、この神社は篤胤の没後の門人が数多くいる場所である。【表2】は、日枝神社の平田門人を一覧にしたものである。まず、宮西中務[1]（一八一七―一八八〇、大助、仲友、諸助）は、文化一四年、江戸浅草寺領の代官本間家に生れ、日吉神社の禰宜宮西氏の養子となった。安政六年三月八日、宮西は斎藤平馬（実平・左二馬）の紹介で権田直助に入門している（『草莽の志士　権田直助』、毛呂山町史料集第五集）。皇朝医学を権田に学んだのである。安政六年に、宮西は権田の年譜「名越舎先生年譜略」を書いている（『草莽の志士　権田直助』、毛呂山町史料集第五集）。このように権田直助との関係が深いことに注

【表２】日枝神社の平田門人

№.	姓名	入門年月日	紹介者	諱など	住所	年齢
882	宮西中務	安政6年4月15日	権田直助	仲友	江戸山王御宮附祢宜	43歳
1327	小川織部	元治1年11月1日	五島広高	源忠旧	江戸赤坂山王社大祢宜	37歳
1328	宮西頼母	元治1年11月1日	五島広高	藤原邦恵	江戸赤坂山王社大祢宜	27歳
1329	諸井図書	元治1年11月1日	五島広高	藤原勝恵	江戸赤坂山王社大祢宜	42歳
1382	浦鬼大学	慶応1年3月12日	宮西仲友	季政	江戸赤坂山王御社	33歳
1383	小川要人	慶応1年3月12日	宮西仲友	織部忠旧男、忠恭	江戸赤坂山王御社	19歳
1479	千勝主水	慶応1年11月10日	小川忠旧	藤原興文	江戸赤坂、山王社祢宜	26歳
1480	松本半	慶応1年11月10日	小川忠旧	菅原清長	江戸赤坂、山王社神主、樹下主膳家来	53歳
2770	樹下内膳	明治1年11月26	小川忠旧	祝部資政	東京、日枝神社神主	27歳
2771	城将監	明治1年11月21	小川忠旧	藤原好成	東京、日枝神社神主	74歳
2772	千勝隼人	明治1年11月26日	小川忠旧	〔宮西大助婿〕藤原季孝	東京、日枝神社神主	19歳
2954	多田采女	明治2年1月15日		源昌嗣	東京、日枝神社々家	45歳
2955	中村勘解由	明治2年1月15日		藤原敞業	東京、日枝神社々家	37歳
2956	諸井伊織	明治2年1月15日		藤原勝次	東京、日枝神社々家	19歳
2957	諸井小膳	明治2年1月15日		藤原忠恵	東京、日枝神社々家	16歳
2958	伊東〔藤〕太一郎	明治2年1月16日		藤原道雄	同上ヵ	46歳
3295	金丸幸衛	明治2年7月15日	小川忠旧	菅原忠兼	東京日枝社祢宜	17歳
3296	浦鬼数恵	明治2年7月15日	小川忠旧	物部季弘	東京日枝社祢宜	14歳
3297	小川千柄	明治2年7月15日	小川忠旧	藤原忠高	東京日枝社祢宜	10歳
3298	山本直江	明治2年7月15日	小川忠旧	源信好	東京日枝社祢宜	25歳

〔注１〕『門人姓名録』№.2866に、「久保長貞〔季茲男〕源憲鄰、明治1年12月13日、武蔵国入間郡下新井村、〔日枝宮司、正七位〕、12歳」とあることを付記しておく。

意しなければならない。つまり、宮西は最初に権田の門人となり、その後、平田塾に入門しているということである。

次に、平田塾の『気吹舎日記』と『金銀入覚帳』のなかで「宮西中務」について記載されている箇所を列挙すれば、

安政六年四月一五日　当国毛呂人権田直助之息年助来、江戸山王之社人宮西中務入門之紹介ニ同道、宮西ハ先年征矢貫を同居之人也（気吹舎日記、報告一二八集三三六頁）。

安政六年四月一五日　壱両壱分壱朱ト三十二文宮西氏（金銀入覚帳、報告一四六集一一八頁）。

安政六年四月一八日　毛呂権田之倅トシ助、宮西中務同道ニて来、宮西ハ筑前太宰府え参詣之由（気吹舎日記、報告一二八集三三七頁）。

慶応元年五月一二日　弐分三朱　書物代　宮西氏

（金銀入覚帳、報告一四六集二一一頁）。

慶応元年五月二七日　壱両弐朱　書物代　宮西大助（金銀入覚帳、報告一四六集二一二頁）。

慶応二年三月七日　権田直助・宮西大助・落合一平より書状来（気吹舎日記、報告一二八集三四二頁）。

慶応三年四月二八日　壱両弐分弐朱ト弐百七十二文書物代宮西大助（金銀入覚帳報告一四六集二六九頁）。

慶応三年四月二八日　宮西大助・片桐省介来（気吹舎日記、報告一二八集三六〇頁）。

慶応三年一一月七日　水原主水君・宮西大助来（気吹舎日記、報告一二八集三六九頁）。

となる。右によれば、宮西が権田の息子年助と塾に来て入門したのである。『門人姓名録』では権田直助の紹介で入門したとあるが、実際の入門の経緯はこの通りであった。安政六年には太宰府に参詣する計画もあった。維新後、宮西は宣教師に奉職し、後に秋山光條の主催する『日要新聞』の主筆となり、また大鳥神社、三島神社、阿夫利神社等の祠官に歴補され、明治一三年七月三〇日に死去した。近代の荒波を乗り切った門人の一人である。

②宮西頼母

次いで、中務の子宮西頼母[2]（一八三八―一九一〇年、邦恵・邦維）であるが、天保九年一二月六日、江都星岡に生まれ、安政四年一〇月、家職をつぎ山王祀職となった。平田塾の日記などから頼母に関する記事を抜粋あるいは要約すれば、

安政二年六月二五日　宮西頼母来（気吹舎日記、報告一二八集二九五頁）。

元治元年一一月一日　平田塾入門（門人姓名録）。

慶応二年九月一九日　御例祭のため、宮西頼母などが来る（気吹舎日記、報告一二八集三五〇頁）。

慶応三年九月一九日　御霊祭のため宮西頼母などが来る（気吹舎日記、報告一二八集三六六頁）。

慶応三年九月一九日　五匁　書物　宮西頼母（金銀入覚帳、報告一四六集二八〇頁）。

となる。御例祭・御霊祭というのは平田家が篤胤を祭るものであり、頼母はそこに出席していたということである。維新後に日枝神社祠掌となり、ついで神田・湯島・根津の三社に歴任した。明治四三年四月大教正となった。その他、【表2】によれば、日枝神社には多くの平田門人がいたのである。時流をよく見極めて大量に入門者を出した。日枝神社は、江戸時代まで幕府から尊崇を集める神社であったが、新時代に巧みに転身することができたのである。

（三）品川神社神職小泉帯刀と「五岳真形図」

品川神社神職の小泉帯刀についての『気吹舎日記』の記事などを拾ってみると、次のようになる。

安政二年二月二一日　品川大明神神主小泉帯刀、同道人岸田如同両人初て来（報告一二八集二九二頁）。

安政二年二月二一日　小泉、平田塾入門（門人姓名録）。なお、その後、しばしば来塾している（『気吹舎日記』）。

安政二年八月一八日　品川小泉帯刀叔父岸田如同同道ニて、五岳図拝見ニ来（報告一二八集二九六頁）。

安政二年九月二日　品川神主小泉帯刀、叔父岸田如同と同道ニて来、真仙之御書類拝見致ス（報告一二八集二九七頁）。

安政三年九月八日　一弐朱　書物　小泉帯刀殿（金銀入覚帳、一四六集九三頁）。

安政四年一一月五日　一弐朱　書物代金　品川小泉（金銀入覚帳、一四六集一〇五頁）。

八月一八日に道教の五岳真形図を塾で見ていることがわかる。九月二日にも、神仙関係の用事で来ている。小泉は道教に親和的な平田国学に高い関心を示していたことが見てとれる。なお、品川神社の史料について

少し補足しておきたいと思う。『東京神社史料』第五輯（東京都神社庁、昭和四三年一一月）一五七～二四八頁に「御新政後記録（抄）」（品川神社所蔵）が所収されている。これは品川大明神一三代神主小泉勝が明治元年より同三年までの諸通達・取調書・意見書申書などを二冊に編纂したものである。当時の准勅祭社・神仏分離関係の記載がみられる貴重なものである。

（四）神田明神社家の木村庸之助

【表1】は神職の一覧であるが、神田神社の社家木村庸之助も含まれている。『気吹舎日記』の中から木村に関する主な個所を抜粋すれば、

嘉永元年三月四日　神田明神家木村庸之助入門、春日大炊同道（気吹舎日記、報告一二八集二一九頁）。

嘉永二年四月一九日　拾弐匁　木村庸之助　玉の真はしら（金銀入覚帳、報告一四六集四〇頁）。

嘉永二年四月四日雨　木村庸之助来（気吹舎日記、報告一二八集二二八頁）。

嘉永三年二月廿一日　天気　木村庸之助来（気吹舎日記、報告一二八集二四六頁）。

嘉永四年六月三日　木村庸之助来（気吹舎日記、報告一二八集二五七頁）。

となる。平田塾に頻繁に来ており、入金もしばしば確認できる。『霊能真柱』を入手していたことも興味深いのである。後述するように日枝神社に門人が多いのと対照的に、神田神社の神職は一人しか入門していない。但し、木村を通して平田派の動向についても神田神社の神職に伝わっていた可能性があろう。なお、【表1】によれば、これら以外にも神職の入門者がいたことがわかる。ほとんどが明治以降の駆け込み入門であった。

二　平田国学の拡大と大宮氷川神社・武蔵御嶽神社

（一）一大拠点としての大宮氷川神社

①篤胤生前の門人岩井中務と『仙境異聞』

大宮氷川神社は、聖武天皇の時代に「武蔵国一の宮」

となり、延喜式神名帳に名神大社として名を残している。旧官幣大社の一つでもある。氷川神社の平田門人を一覧にすれば、【表3】のようになる。

岩井中務は平田塾に入門した最初の大宮氷川神社の神職である。『仙境異聞』の文政三年一一月一〇日のところに、「今井□□、伴信友、岩井中務、山崎篤利、笹川の正雄など来りて、種々の物語しけるに」（『仙境異聞』上一）とある。岩井が『仙境異聞』に登場しているのである。少年寅吉の語る仙境譚を興味深く聞いていたのではないだろうか。また、平田塾の日記の中から主な事項を抜粋してみると、

文政四年八月四日　岩井中務出立、旦那持料の劔納る、（篤胤の佩刀を奉納した）」（気吹舎日記、『平田篤胤研究』九二四頁）。

文政七年九月　岩井中務此頃来居る（気吹舎日記、『平田篤胤研究』九三六頁）。

文政八年六月二日　石井中務殿入来、泊り（気吹舎日記、『平田篤胤研究』九四四頁）。

天保元年閏三月九日　雨、上総岡沢織部来、夜、石川土佐来、岩井中務へ神拝式為持遣る（気吹舎日記、報告一二八集二二頁）。

天保元年八月四日　石川大和来、岩井伊予書状祝儀等持参也（気吹舎日記報告一二八集二八頁）。

天保二年六月二九日　大宮、岩井伊予へ書状出す（気吹舎日記、報告一二八集四〇頁）。

天保二年七月一七日　桜井進、岩井伊予へ書状出（気吹舎日記、報告一二八集四一頁）。

天保三年一月二七日に　関大和へ書状出、岩井伊予へも出（気吹舎日記、報告一二八集四八頁）。

天保四年九月　岩井伊豫方へ書状出（気吹舎日記、報告一二八集七二頁）。

天保四年九月二八日　岩井伊豫より社家高野相模を使として書状并金子壱両到来（気吹舎日記、報告一二八集七三頁）。

天保四年一一月五日　大野河内来、岩井中務事、昨四月□□□（虫食い）のよし（気吹舎日記、報告一二八集七四頁）。

となる。最後の天保四年一一月五日の箇所は虫食いになっているが、岩井の訃報を平田塾に連絡したものとみられる。以後、長期間、大宮氷川神社から入門者が出ていない。この岩井中務は特別であるが、武蔵一宮にいちはやく平田国学が浸透したことは注目に値するのである。

②岩井宅道と明治元年の氷川神社行幸

次に、篤胤没後門人の岩井宅道[3]（一八三九～一八八二、いわい・いえみち）である。高鼻村（さいたま市）生まれで、生家である氷川神社の神職となった。『気吹舎日記』には、

慶応三年四月一四日　武蔵国一宮岩井伊予来、入門（気吹舎日記、報告一二八集三五九頁）。

慶応三年四月一五日　壱分大宮入門　岩井伊予（気吹舎日記、報告一四六集二六八頁）。

とある。右の両者では、日付が一日ずれているが、今は深入りしないことにする。明治元（一八六八）年氷川神社世襲神主となる。明治元年一〇月一六日、神祇官権判事平田延胤らが事前に氷川神社を訪問し検分している。明治元年一〇月二八日、明治天皇の氷川

【表３】氷川神社の平田門人

No.	姓名	入門年月日	紹介者	諱など	住所	年齢
219	多田峰次郎	文政2年閏4月17日	柴田	（後に岩井中務、伊予）、重満（物部正興）	小日向茗荷谷多田三八郎次男、〔上総国長柄郡関村白子明神々主岡沢氏養子〕、後当国一ノ宮足立郡大宮氷川神社　男躰宮神主〔家相続〕	21歳
1751	岩井伊予	慶応3年4月14日		宅道	武蔵国一宮、氷川神社神主	26歳
2717	東角井五位	明治1年11月		物部福臣	武蔵国、一宮氷川神社祢宜	16歳
2718	西角井五位	明治1年11月		物部忠正	武蔵国、一宮氷川神社祢宜	46歳
2779	井上周太郎	明治1年11月	岩井宅道	源信政	武蔵国一宮、氷川神社々人	37歳

神社行幸が挙行された。事前の検分や行幸については『気吹舎日記』や『大宮市史』資料編三所収の『行幸記』に記されている。同年一二月、柴崎隼人（『門人姓名録』№二七七七、藤原宣弘）の平田塾入門の際、岩井宅道が紹介者としての役割を果たしている。柴崎は武蔵国荏原郡麻布の氷川神社神主で、三五歳であった。この神社は現在、麻布氷川神社（東京都港区元麻布一―四―二三）となっている。

新たに任命制の神職が補任されたため、宅道は明治四年退官した。明治六年、井上頼国に入門し皇学を研究する。明治八年八月井上は岩井宅道に『神官年中行事』（神習舎）を著作させ、校訂を加えて神習蔵版とした（『井上頼国小伝』）。この『神官年中行事』は現存している（国立国会図書館近代デジタルライブラリー参照）。井上は元神職にふさわしい仕事を与えたのである。しかし、神社を追われた元神職には新時代への適応は容易なことではなかったのである。

③東角井福臣と井上頼国の神習舎

篤胤没後門人の東角井福臣[4]（一八五三―一九四二、ひがしつのい・ふくおみ）は、嘉永六年八月二日に高鼻村（さいたま市）生まれ、父は周臣（ちかおみ）である。明治元年氷川神社累代の社家である角井家を継ぎ、駿河を襲名した。明治元年、同社勅裁社列格に伴い禰宜職を補され、姓を角井から東角井に改める。叙従五位。同年一〇月二八日、明治天皇御親祭に奉仕し、明治四年に平田塾に入門している。氷川神社神職の西角井家の日記の明治六年三月一七日の項目には、次のように書かれている（『大宮市史』資料編三、四四〇頁）。

福臣方へ相送り候本々覚

一　古史成文　三冊
一　古史伝　廿八冊
一　日本書記　十五冊
一　神教要旨　壱冊
一　同略解　壱冊
一　神代系図　此分見当り兼候
一　古事記　三冊
一　玉太須記　九冊
一　俗神道大意　四冊
一　古今妖彪考　三冊

東京より手紙壱封相届　但し福臣事十二日夕方当家

【表４】氷川神社西角井家文書の平田国学関係書籍

No.	書名	著者	型態	備考
1	霊能真柱　上・下	平田篤胤	縦	
2	天満宮御伝記略　上・下	平田篤胤	縦	
3	大扶桑国考　上・下	平田篤胤	縦	
4	玉襷　一～十	平田篤胤	縦	巻十のみ２部
5	毎朝神拝詞記　全	平田篤胤	折本	
6	皇典文彙　上中下	平田篤胤	縦	
7	俗神道大意	平田篤胤	縦	
8	牛頭天王暦神弁	平田篤胤	縦	
9	玉襷一覧抄外		縦	
10	入学問答	平田篤胤	縦	
11	〔再生記聞　上巻〕（写）	平田篤胤	縦	
12	〔再生記聞　下巻〕（写）	平田篤胤	縦	
13	〔再生記聞附録〕（写）	平田篤胤	縦	
14	医宗仲景考　（版本）	平田篤胤	縦	
15	古今妖魅考　一之巻	平田篤胤	縦	
16	古今妖魅考　二之巻　（版本）	平田篤胤	縦	
17	古今妖魅考　三之巻　（版本）	平田篤胤	縦	
18	春秋命歴序考　上下　（版本）	平田篤胤	縦	
19	稽古要略　（版本）	緑河藤好尚	縦	
20	古史略（版本）	角田忠行	縦	
21	古史伝　二～四、一六～二八　（版本）	平田篤胤	縦	

〔注１〕古史伝２、３、４巻に印記「?池館／図書記」（朱方印）あり。

〔注２〕古史伝16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28巻に印記「埼玉県／中教院／之」（朱長方印）あり。

〔注３〕古史伝16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28巻に、修成講社の納主の奥書あり。

ヲ出立致十三日ニ松岡時□方へ参り面会色々相談之
上井上頼囦先生へ入塾万事都合も宜敷右ニてハ本類
其外入用之品早々相届可申趣申越ス
（中略）
松岡時シゲ先生世話ニて
赤坂薬研坂住居　井上頼囦先生方へ入塾致ス

これによれば、福臣が井上頼国に入門したのは明治六年となろう。大宮氷川神社の西角井に対して平田国学関係の書籍（『古史成文』、『古史伝』、『神代系図』、『玉太須記』、『俗神道大意』、『古今妖彪考』）の送付を依頼しているのである。これらは当時すでに刊行されていたものであることから、すべて版本とみられる。少し補足すれば、『神教要旨』の著者は不明であるが、『神教要旨略解』は近衛忠房・千家尊福の著書で明治五（一八七二）年に刊行されたものである。福臣が井上の塾にどれほどの期間学んでいたのかは明らかではない。明治一四年大講義に補され、一六年皇典講究所委員、二一年物部教会（神道大成教）少教正、二二年埼玉県神道分局長となった。このようにかつて平田門人であった東角井福臣が、後には物部教会（神道大成教）少教正となるのであった。まっ

【表５】武蔵御嶽神社の平田門人

No.	姓名	入門年月日	紹介者	諱など	住所	年齢
314	金井太郎市	文政9年3月2日	大中臣郡継理兵衛	後東市	秩父郡〔秩父多摩〕御嶽山〔今東京府西多摩郡三田村府社御嶽神社ナリ〕神主左衛門〔郡枝〕男	
1078	北島左門	文久2年閏8月26日		主道	武蔵国御嶽山	45歳
1177	尾崎靱負	文久3年7月2日		藤原重豊	武蔵国御嶽山	41歳
1365	片柳左京	慶応1年2月1日		藤原智喜	武蔵国御嶽山	51歳
1366	片柳宮内	慶応1年2月1日		藤原一輔	武蔵国御嶽山	44歳
1377	片柳中務	慶応1年2月28日		藤原美貴	武蔵国多摩郡御嶽山	36歳
1391	須崎大内蔵	慶応1年3月7日	片柳	藤原	武蔵国多摩郡御嶽山、大麻止乃豆乃社神官	42歳
1392	馬場求女	慶応1年3月7日	片柳	藤原正卿	武蔵国多摩郡御嶽山、大麻止乃豆乃社神官	36歳
1393	片柳右衛門	慶応1年3月7日	片柳	藤原	武蔵国多摩郡御嶽山、大麻止乃豆乃社神官	22歳
1394	岸野左内	慶応1年3月7日	片柳	藤原頭謹	武蔵国多摩郡御嶽山、大麻止乃豆乃社神官	28歳
1395	須崎衛守	慶応1年3月7日	片柳	藤原卿敬	武蔵国多摩郡御嶽山、大麻止乃社神官	32歳
2846	金井大副	明治1年12月	秋山清高		武蔵国多摩郡御嶽山、太麻止乃豆乃天神社人	
2847	須崎出羽	明治1年12月	秋山清高	藤原茂広	武蔵国多摩郡御嶽山、太麻止乃豆乃天神社人	33歳
2848	片柳摂津	明治1年12月	秋山清高	藤原豊照	武蔵国多摩郡御嶽山、太麻止乃豆乃天神社人	30歳
2849	片柳大進	明治1年12月	秋山清高	藤原高救	武蔵国多摩郡御嶽山、太麻止乃豆乃天神社人	22歳

たく新しい道に進んだのである。平田国学から神道大成教へというのは珍しい事例であろう。

④西角井忠正と西角井家文書

西角井忠正[5]もまた井上頼国に入門している。埼玉県立文書館所蔵の西角井家文書の中の平田国学関係書籍を抜き出せば、【表４】のようになる。このように特殊なものはないが、平田国学関係の基本的な書名が並んでいるといえよう。このうち『古史伝』に、修成講社の納主の奥書があることに注意しなければならない。

以上のように、氷川神社では篤胤生前からすでに門人がいたのであった。いち早く平田塾に門人を出し、篤胤没後にも数人入門している。武蔵国における平田派の重要拠点の一つとなったのである。

（二）武蔵御嶽神社における門人の増加

①金井太郎市の入門

武蔵御嶽神社[6]は天平年間に行基が坊舎を造立し、鎌倉時代に蔵王権現を合祀して御嶽御蔵権現と称し、関東地方の蔵王信仰の中心となった。のちに徳川家康の尊崇

を受けることになる。武蔵御嶽神社の平田門人を一覧にすれば、【表5】のようになる。多数の入門者がいたことがわかるであろう。まず、【表5】に見える金井太郎市（東市、郡継）であるが、平田塾の日記に散見される記録を挙げれば、

文政四年三月二日　御嶽山神主金井左衛門子息太郎市入門也（『気吹舎日記』、『平田篤胤研究』九六三頁）。

天保三年一〇月一四日　御嶽山金井太郎市事、東市、久々ニて来（気吹舎日記、報告一二八集五八頁）。

天保五年一月五日　金井東市、同弟弁蔵来（気吹舎日記、報告一二八集七六頁）。

天保五年二月五日　金井東市書状来（気吹舎日記、報告一二八集七頁）。

天保六年三月八日　金井東市へ書状出す（報告一二八集九二頁）。

天保六年四月一五日　宮負佐五兵衛来、宇井出羽・平山伊右衛門・また御嶽山金井東市之書状持参（気吹舎日記、報告一二八集九四頁）。

となる。篤胤生前の文政四年というかなり早い段階で入門していたが、しばらく途絶えて、天保三年に再び塾に顔を出している。記録は天保六年までである。

②征矢貫と武蔵御嶽神社

平田門人の征矢貫[7]（そや・つらぬき、滋野貫、『門人姓名録』№六三四）は、平田篤胤関係資料にもしばしば登場する人物である。権田直助に学んで、後に平田塾に入門する。『門人姓名録』によれば、信濃国に生まれて武蔵国入間郡吉田村に在住し、嘉永三年九月一五日に安藤直道の紹介で入門している。

平田塾の『気吹舎日記』嘉永五年六月朔日朝の記事に「征矢貫知人御岳人社家　来、状持参」と記されている。征矢の知人武蔵御嶽山の神職から平田塾に書状が送られていたのである。この際の書状の控えとみられるものが、『金井家文書』の目録に見つかるのである。すなわち、五月一七日付の征矢貫書簡平田内蔵之助様

御近待衆中宛書状である（『武蔵御嶽神社及び御師家古文書学術調査報告書（1）―金井家文書目録―』四八〇頁）。これは征野が大祓祝詞正訓折本二二本・古史正文三冊請納されたき旨を記した書状である。伝来の経緯からすれば、控えとみられる。また、この『金井家文書』の目録には、篤胤著『童蒙入学門』、竹内孫市著『古道学弁書』、篤胤著『志都能石屋講本』といった平田国学関係の書籍を確認できるのである。これらは平田塾から御嶽山に送付された書籍の一部と考えられるのである。

③武蔵御嶽神社の神仏分離と平田門人

【表5】にみられるように、武蔵御嶽神社では幕末維新期に平田門人が急増した。『金井家文書』には、御嶽山における神仏分離に関する史料も多数含まれている。これによれば、平田門人もかかわっていたことが確認できる。御嶽山では新政府の方針を予め知っていたかのように、神仏分離が速やかに行われた。平田派が多くいたことによって情報をいち早く得ていたのではないだろうか。従来の武蔵御嶽神社研究は、この山が平田派の一大拠点であったことが考慮されていない。ここで武蔵御嶽神社における神仏分離について詳述する準備はないが、右のような見通しのみ記しておくことにしたい。

三　武蔵国のその他の諸社と平田門人

（一）高麗神社の高麗大記

本稿の第二章では、大宮氷川神社・武蔵御嶽神社といった平田派の拠点というべきものを見てきた。それら以外の平田門人にも注意しなければならない。しかし、その多くが明治以降の入門である。高麗大記については、『日高市史』にも記述があるが、平田国学研究の世界ではあまり知られていない人物である。嘉永二（一八四九）年に父の後を継いで、高麗大宮社の別当大宮寺の住職（修験）となる。この頃から父の寺子屋・私塾も継承したという。なお、高麗神社には高麗家住宅（国指定重要文化財）が現存している。

また、高麗大記[8]の日記にみられる平田国学関係の記事をあげれば、

文久四年三月朔日　　毛呂助太郎京都より帰り候而、昨日面会致候趣、京都辺静謐

文久四年七月七日　之趣也（第一巻三三頁）。
　毛呂権田年助江参る、父江之伝書之嘶致候事（第一巻三九頁）
文久四年七月一四日　権田年助来（第一巻三九頁）。
文久四年七月二〇日　毛呂直助来る（第一巻五〇頁）。
明治二年一月　平田塾に入門（平田塾の『門人姓名録』）
明治二年八月一〇日　飯能江行、早川より中居江廻る、権田直助ハ早川之妻之父也、東京大学校中博士ニ相成従五位、平田大角大博士従六位、井上肥後鉄宣と改助教ニ而正七位（第一巻一四三頁）。

となる。文久四年に集中していて、権田直助父子と交流があったことがわかる。その後、高麗の日記に権田が登場するのは明治二年になってからである。横田稔編『高麗神社・高麗家文書目録』（高麗神社社務所、二〇〇六年一一月）五四三頁に、大記が明治三年に筆写した篤胤著『古史成文』一之巻・二之巻・三之巻が記されている。平田門人としての大記の勉学の一端がうかがわれるのである。

神仏分離令に伴い、大記は明治元年に修験をやめて還俗し、高麗神社の祠掌となった。同四年に飯能の郷学校が開設されるとそこで『論語』を教え、同六年に私塾を閉鎖して小学校教員となった。明治二一年まで務め、同三三年に死去した。高麗大記が平田国学に深くかかわったのは一時であったと思われるが、神職・教員として地元に貢献していたのである。

（二）熊野大神神主の清水賢良

清水賢良[9]（一八四二―一八八六）は、代村（熊谷市）に生まれ、幼少より学を好み、同地の養平寺の僧明弁について漢学を学んだ。安政五（一八五八）年父の寺子屋を継承、門弟一〇〇余を数えた。明治初年には前の大学頭林学斎に経史を学んだ。なお、林学斎は、幕府崩壊後に司法省に勤務しているが、まもなく辞職した。東京大学史料編纂所の江戸幕府儒官林家関係資料には、林学斎の経歴を知ることのできる辞令類が豊富に残されている。

また、大里郡代邨熊野大神神主清水織江賢良の入門願（平田篤胤関係資料三―一一―九）を次に挙げておきた

い。

一札

一私儀御入門御願上候儀者学事一通之儀ニ而余事之志願等聊も無御座候間、御聞済被成下候様、御取計可被下候、若此上私身分ニ付官江相懸候儀致出来候共、私一身ニ而仕　師家江御苦労相懸申間敷候、依之一札如件

明治三年庚午

武州大里郡代郷
熊野大神神主
清水織江
賢良（花押）

気吹舎大人
御取次衆中

清水は平田国学以外にも様々なことを学んでおり、多くの素養の一つに平田国学があったのである。神職として活躍する一方、教員としても働き、明治一九年に死去したのである。平田派の門人の標準的な事例と思われる。

（三）岩田大学と修験者の入門

岩田大学[10]（吉弘）は秩父郡吾野村高山（飯能市）に生まれ、高山不動尊別当常楽院配下椙本坊の修験となった。幕末に京都の神祇管領吉田家の神道伝授を受けた。安政期に『開運五行録』を著し、高山に鎮座する三輪神社を中心とする高山神道を首唱したという。この『開運五行録』（一八五〇年刊、三五丁）が現存していて、埼玉県立浦和図書館と京都府立総合資料館などに所蔵されている。但し、これは岩田が平田塾に入門する以前に著したものである。明治元年一一月一日に岡部愛信の紹介で平田塾に入門している（『門人姓名録』№二六八九、藤原吉隆）。入門時には、武蔵国高麗郡高山の三輪神社祢宜であった。現在の飯能市高山一五六の三輪神社である。

（四）協心神習舎と元神職の教員

権田直助門人中村猶太郎[11]は平田門人ではないが、上長淵（青梅市域）の名主で、維新後に同村戸長となった。権田の私塾名越舎に学んでいる。中村は上長淵外一四ケ村の有力者と協議して、明治六年の学制発布に先立ち、本郡最初の郷学校「協心神習舎[12]」を上長淵の地に創立した。井上頼国、斎藤真指[13]（『門人姓名録』№三〇八一）

【表６】明治5年協心神習舎の教師・助教一覧

№.	職	氏名	肩書	年齢	門人姓名録
1	教師	井上頼国	東京府横瀬貞篤家来	34	№1018
2	代教師	斎藤眞指	乗願寺村（現在市内勝沼）元年寄役	51	№3081
3	助教	宿谷長吉	今井村宿谷源造男	25	
4	同上	石川隆八	藤橋村名主	35	№4089
5	同上	三枝松次郎	乗願寺村医師	30	
6	同上	岡本喜太郎	下村（現在市内梅郷）名主	39	№4188
7	同上	渡辺小三郎	名主	40	№4189
8	同上	青樹善太郎	青樹善平男（下村）	27	№4190
9	同上	榊田茂輝	旧神官（下村）	43	
10	同上	小平柳舟	沢井村医師	40	
11	同上	福田操三	名主勝三男（沢井村）	31	
12	同上	原嶋定平	小丹波村名主	36	
13	同上	中村保次郎	上長淵村名主中村猶太郎男	20	№4187
14	同上	玉川景元	旧神官（長淵村）	44	
15	同上	宮川武寿	羽村旧神官	33	№4087
16	同上	岩村正盛	日向和田村旧神官	39	№4086
17	同上	三田左名以	下長淵村名主	43	

〔注1〕『青梅市教育史』59頁の表を修正して作成。中村文書については、翻刻が掲載されている。

〔注2〕藤原眞指（斎藤源左衛門）　武蔵国多摩郡勝沼村　明治2年1月18日入門　48歳

〔注3〕石川隆八（源隆八）　武蔵国藤橋村　明治3年8月入門　33歳

〔注4〕岡本喜太郎（源綏則）　武蔵国多摩郡下村里正　明治4年3月入門　岡部愛信紹介

〔注5〕渡部小三郎（源修）　武蔵国多摩郡下村里正　明治4年3月入門　岡部愛信紹介

〔注6〕青樹善太郎　武蔵国多摩郡下村里正　明治4年3月入門　岡部愛信紹介

〔注7〕中村保次郎（藤原規最）　武蔵国多摩郡上長淵村　明治4年3月入門　岡部愛信紹介

〔注8〕宮川武寿（中臣寿）　武蔵国多摩郡羽村　玉川水神両社神主　明治3年3月入門　岡部愛信紹介

〔注9〕岩村正盛（勤）　武蔵国多摩郡日向和田村　和田社神主　明治3年3月入門　岡部愛信紹介

などを招いて教師陣としたのである。この協心神習舎は平田国学の幼童教育の理念に従って開設された。ここで教鞭をとった斎藤真指は、明治二年一月一八日に岡部愛信の紹介で平田塾に入門している（武蔵国多摩郡勝沼村、四八歳）。井上頼国らにも学んだ人物でもある。協心神習舎のように平田門人が多数採用された郷学校があったのであり、これは全国的にも珍しいといえよう。協心神習舎の教員を一覧にすれば【表６】のようになる。この中に、元神職というものがかなり含まれている。世襲神職の禁止によって、神社を追われたものとみられる。彼らの受け皿としてこの協心神習舎は機能していたのである。青梅市の教育史上において欠かすことのできない存在である。多くの変遷を経て、今日、青梅市立第二小学校として継承されている。平田国学の遺産というべきであろう。

その他、武蔵国の平田門人のいた神社を一覧にすれば【表７】のようになる。多くが、明治以降の入門であることがわかるであろう。多摩郡のところをみると、書肆の岡部愛信が頻繁に紹介者として登場していることに気が付くのである。【表７】の神職の中にも世襲神職廃止に

【表７】武蔵国の神職の平田門人

No.	姓名	入門年月日	紹介者	諱など	住所	年齢	現在地（推定）
2769	春日部八郎	明治1年11月13日	島村道弘	孝純	武蔵国埼玉郡粕壁宿、上八幡宮神主	53歳	埼玉県春日部市大字粕壁5597 春日部八幡神社 ※上の八幡
2789	関根図書	明治1年11月	島村道弘	源宗邦	武蔵国埼玉郡粕壁宿、春日部下宮〔下〕八幡〔宮〕神主	23歳	埼玉県春日部市粕壁東２丁目（春日部）東八幡神社　※下の八幡
3190	石井立敬	明治2年5月27日	岩井	忠篤	武蔵国埼玉郡備後村、香取大神々主	47歳	埼玉県春日部市備後東1-2717 備後香取神社
3451	荒井首令	明治2年11月5日	秦	源幸周	武蔵国忍〔城内〕〔東照宮神主〕	64歳	埼玉県行田市本丸12-5　忍東照宮
3750	家那左近	明治3年4月24日	田中定秋	藤原定利	武蔵国崎玉郡上中条村、千形大神・家奈祇大神	15歳	埼玉県熊谷市本町１丁目　手形神社
3948	今井隼雄	明治3年10月	奥野	藤原智卿	武蔵国埼玉郡今井邨、赤城大神々主	25歳	埼玉県熊谷市今井282 赤城神社
739	稲垣進	嘉永6年4月23日		琴成	武州足立郡糠田村〔足立郡箕田八幡祠官〕	50歳	埼玉県鴻巣市箕田2041　氷川八幡神社（箕田八幡神社と通称）
2722	関口美作	明治1年11月		中臣由恒	武蔵国足立郡芝郷、羽尽神社神主	36歳	埼玉県川口市大字芝5379-1 羽盡神社（はぞろじんじゃ）
2747	榎本大膳	明治1年11月	中嶋		武蔵国足立郡上大久保村、氷川稲荷・天満宮神主	17歳	埼玉県さいたま市桜区大字上大久保579　上大久保氷川神社
3004	村上右近右衛門	明治2年1月		隆喜	武蔵国足立郡赤山領、神明宮神主	48歳	不詳
3005	鈴木宮内	明治2年1月		義文	武蔵国足立郡下青木村、氷川大神々主	38歳	埼玉県川口市青木5丁目18番48号　氷川神社
3006	本間新左衛門	明治2年1月		源貞鎮	同上？	34歳	不詳
3135	宮野監物	明治2年4月16日	宮本芳郡	源好古	武蔵国足立郡内野村、氷川神社神主	44歳	不詳
3136	榎本伊勢	明治2年4月16日	宮本芳郡	源義明	武蔵国足立郡塚本村、神明宮神主	50歳	さいたま市西区塚本町2-180-1　神明神社
3289	仲田式部	明治2年7月9日	鈴木義文	連栄	武蔵国足立郡大間木村、神明宮神主	42歳	さいたま市緑区大間木909 神明社
3290	弓削左膳	明治2年7月9日	鈴木義文	映顕	武蔵国足立郡大間木村、神明宮神主	24歳	さいたま市緑区大間木909 神明社
3304	大熊主殿	明治2年7月			武蔵国足立郡中居村、八幡宮神主	14歳	川口市八幡木1-25-2　八幡神社
3611	横田大膳	明治2年11月23日			武蔵国足立郡横曽根村、氷川神社神主	24歳	埼玉県川口市南町1-15-10 横根曽神社
3612	鈴木大学	明治2年12月			武蔵国足立郡下青木村、諏訪神社神主	34歳	不詳
2703	森村大和	明治1年10月	岡部愛信	橘儀一	武蔵国入間郡上野村、大宮聖天宮神主	27歳	埼玉県入間郡越生町上野1732 大宮神社 ※聖天社、または聖天宮と呼ばれていたが、明治２年大宮神社と改称。
2704	石井宮之亮	明治1年10月	岡部愛信	藤原明吉	武蔵国入間郡和田村、春日大明神々主	32歳	埼玉県入間郡越生町西和田318　春日神社
2707	宮崎筑前	明治1年10月	岡部愛信	橘高純	武蔵国入間郡葛貫村、住吉大神々主	42歳	埼玉県入間郡毛呂山町葛貫735-1 住吉四所神社
2767	古谷主殿	明治1年11月晦日	吉岡寛斎	亮興	武蔵国入間郡古尾谷荘、八幡宮神主		埼玉県川越市古谷本郷1408 古尾谷八幡宮神社
3117	鈴木図書	明治2年2月20日		長英	武蔵国川越藩、神明宮神主	58歳	埼玉県川越市神明町　神明宮
3134	中蔵人	明治2年4月16日	宮本芳郡	藤原太祐	武蔵国入間郡南畑村、水越神社神主	32歳	埼玉県富士見市上南畑295 上南畑神社　※水越明神社と
3191	紫藤和泉	明治2年5月27日	井上正方	藤原宣安	武蔵国入間郡毛呂本郷、出雲伊波比神社神主	22歳	埼玉県入間郡毛呂山町岩井西5丁目17-1 出雲伊波比神社
4317	沢田久雄	明治4年7月24日	久保季茲	藤原頼景〔後改頼雄〕	武蔵国入間郡藤沢村、熊野神社神主	18歳	埼玉県入間市下藤沢801 熊野神社
2689	岩田大学	明治1年11月1日	岡部愛信	藤原吉隆	武蔵国高麗郡高山、三輪神社祢宜	71歳	埼玉県飯能市高山156　三輪神社

2690	毛利式部	明治1年11月1日	岡部愛信	大江豊寛	武蔵国高麗郡高山、三輪神社神主	55歳	
2691	毛利主税	明治1年11月1日	岡部愛信	大江書方	武蔵国高麗郡高山、三輪神社神主	36歳	埼玉県飯能市高山156　三輪神社
2693	日影大学	明治1年11月1日	岡部愛信	源永教	武蔵国高麗郡日影郷、日影神社神主	45歳	埼玉県ときがわ町大字日影606　日影神社
2694	武本大学	明治1年11月1日	岡部愛信	〔後改祗直〕、藤原義	武蔵国高麗郡直竹村、富士浅間神社神主	33歳	埼玉県飯能市上直竹下分300-1 富士浅間神社
2696	鈴木出雲	明治1年11月1日	岡部愛信	藤原仲為	武蔵国高麗郡中藤村、白鬚大明神々主	40歳	埼玉県飯能市中藤村中郷231 白鬚神社
2697	鈴木対馬	明治1年11月1日	岡部愛信	藤原仲寿（保良？）	武蔵国高麗郡中藤村、八坂大神々主	45歳	埼玉県飯能市上赤江70番　八坂神社
2700	田中斎宮	明治1年10月	岡部愛信	藤原高重	武蔵国高麗郡鹿山村、八劔大明神々主	45歳	埼玉県日高市上鹿山170　高麗川神社　※明治時代に改称
2702	本橋監物	明治1年10月	岡部愛信	藤原秀正	武蔵国高麗郡唐竹村、白鬚大明神々主	33歳	埼玉県飯能市唐竹8　白髭神社
2705	野々宮市正	明治1年10月	岡部愛信	橘高尚	武蔵国高麗郡野々宮村、野々宮大明神大宮司	40歳	埼玉県日高市野々宮146 野々宮神社
2706	市川宮内	明治1年10月	岡部愛信	橘包隆	武蔵国高麗郡宮沢村、子御前大明神々主	24歳	埼玉県飯能市下加治160-甲,白子神社（しらねぎじんじゃ）※当地にあった白髭神社と旧宮沢村にあった子の御前神社を大正7年に合祀。
2708	高野若狭	明治1年10月	岡部愛信	藤原常雅	武蔵国高麗郡横手村、諏方八幡神主	41歳	埼玉県日高市横手509　鎮守諏訪社（現武幡横手神社）
2765	武田宮内	明治1年11月28日	佐藤	源栄昌	武蔵国高麗郡中藤村、磯前神社神主	50歳	埼玉県飯能市中藤上郷438 磯前神社
3078	高麗大記	明治2年1月	岡部愛信	高倉行純	武蔵国高麗郡高麗郷、大宮白鬚大神々主	44歳	埼玉県日高市大字新堀833 高麗神社
3122	杉山雅楽	明治2年3月20日		藤原公忠	武蔵国高麗郡井上村、井上大神々主		埼玉県飯能市井上349　井上神社
3137	杉山大内蔵	明治2年4月16日	宮本芳郡	平祐長	武蔵国比企郡杉山村、八宮大神々主	21歳	不詳
3167	宮本泉	明治2年4月24日	宮本宣胤	源英長	武蔵国比企郡広野村、八宮大神社神主	51歳	埼玉県比企郡小川町小川９９０－１　八宮神社
3168	宮本広野	明治2年4月24日	宮本宣胤	英長男、源英全	武蔵国比企郡広野村、八宮大神社神主	21歳	埼玉県比企郡小川町小川９９０－１　八宮神社
3220	松岡陸奥	明治2年5月27日	権田年助	忌部弾正	武蔵国比企郡平村、萩日吉神社神主	42歳	埼玉県比企郡幾川村西平1198 萩日吉神社
3403	杉山大蔵	明治2年9月14日		平義純	武蔵国比企郡杉山村、八宮大神々社神主	47歳	不詳
3695	大沢信濃	明治3年2月	中嶋利貞	藤原忠次	武蔵国比企郡奈良梨村、諏訪神社神主	19歳	埼玉県比企郡奈良梨村929 八和田神社（旧諏訪社）　※以前は諏訪社と称されており、明治22年に、8つの村が合併し、八和田村が形成されるにあたり、当社もその村社として、幾つかの神社を合祀し、現在の社名へと改称。
3616	相馬仲	明治2年12月7日		平明祇	武蔵国男衾郡折原村、〔神主〕	18歳	不詳
3694	高橋出雲	明治3年2月	中嶋利貞	藤原光久	武蔵国男衾郡赤浜村、出雲乃伊波比神社神主	29歳	埼玉県大里郡寄居町赤浜723 出雲之伊波比神社
810	福井石見	安政4年1月11日	稲垣琴成	直興	武蔵国大里郡、高城神社神主	30歳	埼玉県熊谷市宮町2-93　高城神社
2321	須長筑前	慶応4年閏4月24日	児玉当行	中臣宜興	武蔵国大里郡相上村、吉見皇大神大祝	28歳	熊谷市相上１６３９－１　吉見神社
2680	里見信太郎	明治1年10月		義信	武蔵国大里郡代村、八幡宮神主		熊谷市代1343（代字八幡）八幡大神社
2766	菅谷淡路守	明治1年11月26日	宇佐美則正	藤原興種	武蔵国大里郡相上村、吉見皇大神々宮		埼玉県熊谷市相上１６３９－１　吉見神社
3947	清水織江	明治3年10月	奥野	源賢良	武蔵国大里郡代邑、熊野大神々主	29歳	埼玉県熊谷市大塚字杉戸田365番　熊野神社

4129	小川幸信	明治4年2月1日	大武知康	平幸信	武蔵国橘樹郡上小田中村、神明宮神主		神奈川県川崎市中原区中原区上小田中6-43-1　神明神社
2695	梅田主計	明治1年11月1日	岡部愛信	菅原良光	武蔵国多摩郡今井村、天満宮神主	37歳	東京都青梅市今井1-130 浮島神社　※浮島天満社（『角川地名辞典　東京都』参照）、霞川増水の際、神社の敷地が浮島のようになったことから、浮島神社となった。
3429	川口弾静	明治2年10月19日	大村	源好澄	武蔵国多摩郡川口村、今熊大神々主	47歳	東京都八王子市上川町19　今熊神社　※明治元年改称。
3883	白鳥昌純	明治3年8月22日	鴨下房麿		武蔵国多摩郡上布田駅、布多天神社神主	59歳	東京都調布市調布ヶ丘 1-8-1 布多天神社
4086	岩村勤	明治3年8月	岡部愛信	藤原正盛	武蔵国多摩郡日向和田村、和田社神主		東京都青梅市日向和田2-317 和田乃神社
4087	宮川武寿	明治3年8月	岡部愛信	中臣寿	武蔵国多摩郡羽村、玉川水神両社神主		東京都羽村市羽東3-8　玉川水神社
4088	机志津馬	明治3年8月	岡部愛信	藤原正長	武蔵国多摩郡畑中村、東畑中社神主	36歳	東京都青梅市畑中2-556　畑中神社　※昔、東畑中神社（今は廃祉）を熊野権現、西畑中神社を箱根権現と称した。明治以後、東西の神社を合祀して畑中神社。
4184	宮本貢	明治4年2月	岡部愛信	藤原豊恭	武蔵国多摩郡福生村、八雲神明両社神主	28歳	東京都福生市福生1081 福生八雲神社
2695	梅田主計	明治1年11月1日	岡部愛信	菅原良光	武蔵国多摩郡今井村、天満宮神主	37歳	不詳
1755	毛利主殿	慶応3年4月15日	岡部愛信	大江鎮書	武蔵国秩父郡高山、三輪神社祠官	41歳	埼玉県飯能市高山156 三輪神社
2699	朝日播磨	明治1年10月	岡部愛信	藤原明信	武蔵国秩父郡、我野三神社大宮司	52歳	埼玉県飯能市吾野226-1 我野神社（あがのじんじゃ）
3007	園田大炊	明治2年1月		忠行	武蔵国秩父郡大宮郷、秩父神社神主	31歳	埼玉県秩父市番場町１－１ 秩父神社
3079	宮本権守	明治2年1月	岡部愛信	菅原栄賢	武蔵国秩父郡下名栗村、神明八幡両社神主	34歳	不詳
3121	枝窪太郎麿	明治2年3月20日		藤原茲見	武蔵国秩父郡我野村、諏訪大神々主		埼玉県深谷市小前田１　諏訪神社

〔注１〕【表１】【表２】【表３】の神社は除外してある。
〔注２〕稲垣進については、平田篤胤関係資料に頻繁に登場する。

【表８】東京十二社と平田門人

No.	神社名	平田門人の有無	平田門人の職務
1	日枝神社	○	神職
2	根津神社	○	神職
3	芝神明宮	○	神職
4	神田神社	○	社務
5	白山神社	×	
6	亀戸神社	×	
7	品川貴船社	○	神職
8	富岡八幡神社	○	神職
9	王子神社	○	神職
10	赤坂氷川神社	○	神職
11	六所神社	×	
12	鷲宮神社	×	

よって神社を去るものもいたとみられる。今日、これらの神社に、かつて平田門人がいたことを知る人は少ない。多くの無名の平田門人のその後の行方はあまり明らかになっていない。新時代にスムーズに適応できたもの、出来なかったもの、両方いたとみられるのである。

四　新政府による東京十二社設置と平田門人

明治元年一〇月、新政府は氷川神社を近代最初の勅祭社とした。先に述べたように氷川神社行幸も行われることになる。さらに、新政府は江戸周辺に位置する主な神社一二社を「准勅祭社」として定めたのである。すなわち、日枝神社、根津神社、芝神明宮、神田神社、白山神社、亀戸神社、品川貴船社、富岡八幡神社、王子神社、赤坂氷川神社、六所神社、鷲宮神社の一二社である。そのうち遠方にある六所神社（府中の大国魂神社）と埼玉県にある鷲宮神社を除いて、東京十社が出来たのである。【表8】のように、平田門人の神職がこの東京十二社にかなりいたのである。平田国学の隆盛は永くは続かなかったが、平田門人がこうした東京の主要な神社に多数いたことに注目したい。明治初期の盛時における平田国学をよく象徴しているのである。

おわりに

以上、本稿では武蔵国における神職の平田門人の動向の検討を通して、平田国学の地域的展開の一端をみてきた。最後にまとめておくことにしたいと思う。

まず、江戸・東京の神職であるが、篤胤生前には入門者数は限られていた。例えば、江川大和は篤胤がまだ無名であった時期に、近くにいて篤胤を助けていた貴重な存在である。天保期に江戸神職の入門者が少ないのは、幕府の目を意識していたものと考えられる。幕末維新期に平田国学の運動が時流に乗ると、江戸・東京から入門者が増加した。殊に、日枝神社は江戸・東京の平田派の重要な拠点となったのである。神田神社の神職が一人しか入門していないのであり、両者の性格の違いがよく出ているであろう。

また、篤胤の没後に江戸周辺すなわち武蔵国の全域の神職層に、平田国学が急速に浸透していった。殊に、大

宮氷川神社をはじめ武蔵御嶽神社のような地域大社の神職が多数入門して平田派の重要拠点を形成したのである。その他にも、高麗神社など武蔵国の神社に、かなりの数の門人がいたのである。平田門人の多数いた神社では神仏分離が比較的スムーズに進行したとみられる。平田国学が武蔵国の神社に与えた影響の一つがこれであろう。

明治四年五月の神職世襲制の廃止は全国の神職に大きな影響を与えたが、それは武蔵国出身の平田門人の神職も同様であった。これによって神社を追われるものもいたのである。平田塾の求心力が衰えた後にも、井上頼国の私塾神習舎や郷学校（協心神習舎）のように平田派の受け皿となる場所があったのである。武蔵国出身の平田門人の神職は、こうした受け皿も活用しつつ近代日本社会の中に新たな道を見出していくのである。尤も、新時代への適応度にはかなりの差があったとみられる。そうした個々の平田門人の行方については、さらに調査が必要であろう。なお、平田家と門人は、明治期に篤胤を永久に祀るための準備を開始している。本教教会の創設である。これについては今後の課題としたい。

【注】

(1) 宮西中務については、『日本人名大事典』第六巻一三九～一四〇頁に立項されている。

(2) 宮西頼母については、明治四三年五月付の「前根津神社々司大教正宮西邦雄奥墓之銘」（平田篤胤関係資料三―二六一―一八）によれば、天保九年一二月六日江都星岡に生れ、安政四年一〇月家職をつぎて山王祀職となる。明治維新後日枝神社祠掌、ついで神田湯島根津三社に歴任。明治四三年四月大教正。順天堂医院にて逝去。七三歳。五月二日谷中日暮里に葬る。

(3) 岩井宅道については、『埼玉人物事典』（一一五頁）に立項されている。岩井宅道についての論考としては、斉藤文孝「大宮氷川神社の明治維新―神主岩井宅道と平田国学運動―」（『大宮の郷土史』第三一号所収、大宮郷土史研究会、二〇一二年三月）などがある。また、通史編である『大宮市史』第四巻に、幕末維新期の氷川神社について多く記されている。

(4) 東角井福臣については、『埼玉人物事典』（六六四頁）に立項されている。さらに、『大宮市史』資料編三の資料解説にも詳しい履歴が記されている。

(5) 西角井文書は、埼玉県公文書館に所蔵されている。なお、西角井正一のことが、『埼玉人物事典』（六一〇頁）に立項されている。

(6) 武蔵御嶽神社については、平成二三年度江戸・東京たてもの園

ビジターセンター展示室の特別展「武蔵御嶽神社と高尾山薬王院」が開催されたように、最近、急速に研究が進んでいる。

(7) 征矢貫については、例えば、権田直助書簡の中にも登場する。新出史料なので、史料紹介を兼ねて二通紹介したいと思う。

①平田篤胤関係資料、三―八―五二―二〇

（嘉永二）年三月二十九日付平田銕胤宛権田直助書簡

別帋啓上仕候、然者麹町山王神官宮西中務先年征矢貫山内滞留中已来の知已に御座候而、一昨年よりをり〳〵尋来、ふかく懇意いたし候処、隠居の身となり、昨夏中より拙家医道に志し、今日まて在塾候処前々太宰府天神へ祈誓有之候迚、彼地へ発足いたし候、随而一旦帰府いたし候序御尊館へ御窮申候、本人義兼而御案内も被為在候通り、御家学御執心にて御書籍等も拝覧いたし研究罷在候処今般先生御門下に相成、往々勤学仕度志願に八御座候へとも隠居之身分万事心底に任せす候由、御吹挙申上候も如何候へとも御仁慈を以入門之義御聞届被下御門人之列に御加被下候ハヽ難有仕合奉存候、さて序なから申上置候者尾張名古屋人にて加藤良造と申者昨秋より拙塾に罷在候、此もの同藩御書物奉行にて有之候へし、深田増蔵に就而経義を学ひ同藩近松彦之進に就而、長沼流の兵法を学ひ、曲渕芳水に就て甲州流之兵道学ひ候よし、学事も大体に詩文も一通りに八相成候、一廉の人物にて至極篤実の者に御座候而、宮西同様拙家医道研究罷在候、其中其御家書之類、拙子所蔵之分、彼是拝読いたし、甚感伏いたし大に憤発いたし候而、なほ怠慢なく勤労罷在候、此ものも追而者御門人にも相願度よし、朝暮心頭にかけ罷在候、折を以御願可申上候間兼而御含置被下候様奉願候、此段序なから申上候

頓首々再拝

三月廿九日　　権田直助

伊吹屋先生

御侍者中

別而御願申上候者、本邦古医籍之内、菅原岑嗣朝臣の金蘭方五十巻八大同類聚方につぎて神方を集録いたし候もの丶由当時在刻之金蘭方　八甚たの偽書ならん、其本東近江八幡之近傍に牧村といふ所に東佐市と申もの秘蔵せる由、医家古籍考に相見え申候、則其文抄書いたし為持候然ル処、岩坂氏の話に彼国ニて西川善六と申人八御門人之由、もし近隣之事に御座候へハ有無さたし被下候様ニは相成申間敷也、ねかはく八乍失礼先生より御同人へ御書被添被下候

様奉希度、左候ハヽ宮西仲務を彼地へ立寄らせ申度候、
此段御勘考被下委曲同人へ被仰聞可被下候、何分にも奉
願候、以上
三月廿八日　　直助

平田先生　　御侍者中

②平田篤胤関係資料、三―一九―二―四
（嘉永期頃）三月一六日付平田銕胤宛権田直助書簡
新暦之御吉兆不可有尽期候、先以先生御始御惣容様御
揃益御男々敷被為遊候、超歳奉恐寿候、乍延引年始御
祝詞申上度、如斯御座候、恐々謹言
三月十六日
一久々御窺不申上、失敬至極御仁恕可被下候、征矢子事、
兼而も申上候通り、拙家近隣に偶居為致置候処、去八
月中上州赤城山下拙生門人の方より学友を以使として
拙宅へさし越候、其もの滞留中征矢子ともをりく会
話懇意いたし、さて同子艱難の様承り甚気之毒ニ存よ
り、拙生ともく相談いたし赤城山内なとは如何有へ
きやなと申立帰り候処、十月中再ひ来候而、同山内ニ
少々連もあるへき様子成とて、征矢子同意いたし、其
後十二月中其もの并、外一人来り、征矢家族引取帰り
申候、右のもの至而実意を尽し往反の路費旁中々の物
入をもいとハす、世話いたし呉候段甚感心いたし候、
其後いまに左右も無之候へとも、先無事に彼地ニ餌食
いたし、学事勤在候事と被存候、兼て御懇情をもかけ
させ申入候事を為御知申上候、御休慮可被下候
一此若者所石州一宮物部神社社家のよし大畑直と申もの
にて一昨年季秋より今春に至り拙宅に滞留勤学いたし
居候処、此度当勤学のため幕府へ罷下り候、此もの元
来文筆とも二曾て学ひ候事無之、唯志のミニ御坐候、
拙宅ニ久しく滞留いたし候へとも　何ほとの学も不相
成、乍併其篤志大方ならす、昼夜無怠慢よく勉強いた
し、内外実意に勤候事、若年には稀成人物二て写本な
とも思の外出来候て苦心致し候かひは、眼前に御座候、
遠国人には候へとも拙家逗留中少之過失も無之、質直
之者に相違無之候、御高館へ参塾御示教承度存念之由
に御座候、乍去貧生いさゝか貯も無之候へハ、入塾と
申には成間敷候へとも、学僕になりとも召遣御閑日御
示教被下候様、又御さし支も被為在候ハヽ、何方へか
御さし図被下候様仕度右本人篤志に免し添書も如斯御
座候、尚委曲本人より可申上候、万事追而参府得　拝
顔可申上候

頓首々に再拝

三月十六日認

平田先生　　権田直助

御侍老中

乍末筆御賢息様方并御惣容様まて御祝詞并時気御見舞宜敷御伝声被下候様、奉願候、以上

(8) 高麗大記の履歴については、「高麗大記　履歴事」が『桜陰日記』第三巻（日高市高麗神社、平成一三年九月）五九七頁に所収されている。高麗神社の文書の目録も刊行されている。『埼玉人物事典』（三四五頁）に「高麗大記」が立項されている。

(9) 清水賢良について、『埼玉人物事典』四〇八頁に次のように説明している。「清水賢良　しみず・けんりょう　天保一三年一〇月一〇日―明治一九年二月一三日（一八四二―一八八六）。教育者。代村（熊谷市）生まれ。幼名民部。幼時より学を好み、同地の養平寺の僧明弁について漢学を学び、安政五年（一八五八）父の寺子屋を継承、門弟一〇〇余に業を授けた。明治初年には前の大学頭林学斎に経史を学び、同六年自宅に代学校を開設、八年熊野・諏訪神社祠掌、ついで九年代学校教員となり、一五年校長に昇任し、在職のまま死去した。」なお、清水は入門時に神職であったことが、『門人姓名録』によってわかる

(10) 岩田大学について『埼玉人物事典』（一一八～一一九頁）では次のように説明している。「岩田大学　いわた・だいがく　生没年不詳　江戸時代後期の神道家。秩父郡吾野村高山（飯能市）生まれ。名は吉弘。高山不動尊別当常楽院配下椙本坊の修験。幕末の国学の交流の中で、京都の神祇管領吉田家の神道伝授を受ける。安政四年（一八五七）三月「開運五行録」を著し、高山に鎮座する三輪神社を中心とする高山神道を首唱した。」

(11) 中村猶太郎（なかむら・ゆうたろう）については、『青梅市教育史』、『埼玉人物事典』など参照。

(12) 協心神習舎については、『青梅市教育史』と青梅市立第二小学校記念誌編纂委員会『神習のあゆみ　青梅市立第二小学校百二十年史』（青梅市立第二小学校、平成三年一二月）が参考になる。

(13) 斎藤真指については、『青梅市教育史』などを参照。デジタル版日本人名大辞典+Plusの解説には次のようにある。斎藤真指【さいとう-まさし】一八二二―一九〇四年。幕末・明治時代の歴史家。文政五年六月六日生まれ。井上頼圀らにまなぶ。明治五年青渭(あおい)神社神職。一一年政府の地誌全国調査のうち神奈川県西多摩郡(二六年より東京府)を担当。成果は「皇国地誌・西多摩郡村誌」としてのこり、東大にも「斎藤文書」として所蔵されている。明治三七年三月二四日死去。83歳。武蔵多摩郡青梅村(東京都)出身。名は邦矩(くにのり)。通称は源左衛門。

【追記】本稿は、二〇一一年一〇月に、埼玉県立歴史と民俗の博物館で筆者が行った講演会「武蔵国の国学者たち―平田篤胤と門人集団―」の一部（神職層の箇所）をまとめたものである。